

スタンドが手に入った
と思ったら、毎日ラン
ダムでしたとさ（白目
りめいく！！

KEY（ドM）

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

こんにちはんこそば。

KEY (ドM) と申します。

ハーメルンで一番初めに投稿した小説を、

要望が多かったのでリメイクするゾ

以下あらすじ。

ジョジョの奇妙な冒険って知ってるか？

もう30年以上連載されている漫画なだけどさ。

え？知らない？

バカ野郎!! あれは人間の義務教育だぞ!!

持っていないなら俺が布教用のやつを貸してやるから、
今すぐ読むんだ!!!

・・・え? 全部で100巻以上あつて大変?

こゝ亀並みに多い?

バカ野郎!! (二度目)

いいから読むんだよお!!

そしたら次はアニメと外伝の作品と一緒に網羅するからな!!

そんなバカなジョジョラーが艦これの世界で、

スタンドの力を身に着けて生きてくとき。

ヤンデレハーレム、逆レイプ路線、

ご都合主義なので注意。

なお、主人公のスタンドは毎日日替わりで変わる模様。

あんま強いのでこない()

不定期でぼちぼちやっていくゾ

それではご覧ください (K B T I T)

K
E
Y
(
ト
M
)

目次

A w a k i n g 目覚め前目覚めた
らどうなるんでしようねえ（震え声）

1

アリアリアリアリアリ：：あり？（○

なあにこれえ（遊戯風）—— 10

そろそろ本編に入っていく話ウソツカ

ナイ（すつとぼけ）—— 18

少女と、俺と、そして—— 25

艦娘というモノ—— 32

バカか、というほうがバカ—— 39

A w a k i n g 目覚め前く目が覚めたらどうなるんで
しようねえ（震え声）

『。』
頭にもやがかかっているような感覚。

グレイトフル・デッドの老化でも喰らったか、と、

目を開けて辺りを見回してみると、

真っ白な空間に立っていることに気が付く。

『???』

自室で寝ていたはずなのに、ここは一体どこだろう、と首を傾げた。

頭がポルナレフ状態だったので、歩いてみようとすると、

目の前にいきなり光り輝く人影が姿を現す。

『・・・おはよう。』

その光はやけにフレンドリーにあいさつをしてきた。

思わず、こちらも『あ、おはようございます』と返す。

『・・・えーと。』

『ああ。気にしないでくれたまえ。——田中太郎くん。』

『!?』

自分の名前を呼ばれて、警戒する。

どうして俺の名前をといて疑問が浮かぶと同時に、

光がけられらと笑いながら話しかけてくる。

『なんだってお見通しき。——ボバくん、モールくん、増田君、

火口くん、中田くん……。いろんな子と友達だったんだねえ。』

『。』

自身の交友関係まで言い当てられ、眉をひそめて目の前の光を凝視する。

他人が知らないであろうことまで、どうしてこも光が知っているのか。

よくわからないが背中中に寒いものを感じ、ぶるりと身を震わせる。

『あ、別に君をどうにかしようってことはないから。：オモチャガホシカッタダケダシ』

何か恐ろしいことを言っているような気もするが、

気にせず目の前の存在を警戒し続ける。

『——さて、一つだけ聴こうか。——君、“選ばれたい”かい?』

◆

「……………兄貴いいいいいいいい!!……………ハッ!!」

がばり、とベッドの上から身を起して、俺はプロシユート兄貴の名前を叫んでいた。しばらくぼーっと天井を眺めていたが、自分が何やら夢を見ていたことだけはかろうじて思い出し、頭をぼりぼり、と掻く。

外では、強い風がごうごうと吹いており、窓ガラスをノックしている。

いかん、アニメで兄貴の勇姿を見ていて、そのまま寝落ちしてしまつたらしい。ベッドから起きて、んー、と伸びをする。

(・・・どんな夢見てたっけ。・・・圧迫祭り?)

圧迫祭りよ!!と大統領夫人の顔が頭の中に浮かび上がり、

それを手でしっしと手で追い払う。

うん、少なくとも圧迫祭りではなかったはずだ。

めいびー。

つけっぱなしだったテレビでは、連日の事件に関する特集を報道しており、

現地ではアナウンサーが実況をしている。

おっと、その前にやることがあった。

ベッドの近くに置いている”ジョジョの奇妙な名言集その②”と書かれた本を手に取り、

今日の名言を復唱する。

「オレのそばに近寄るなああーッ」

今日のボスの死因

く大声の出しすぎで酸欠死く



作った和食の朝飯をテーブルの上に置き、

テレビを見ながらかつこんでいく。

『日々、深海棲艦の脅威は増すばかりであり、

国防のためにも防衛費を拡大させたいという政府の思惑が——』

相も変わらず、深海棲艦のことに関するニュースばかりである。

たまには、ジョジョのアニメの再放送でも流してほしいところである。

深夜枠じゃなく、夕方に放映すれば子供たちがジョジョのアニメを見て、

はまること間違いなしなのに。

食べ終わった飯を台所の洗面台にもって行って、

てきぱきと片付けていく。

一番く〇で当てた、ジョジョ4部のコップをしまい、

いつものスーツ姿に着替え、バッグを手に持つ。

「あつ。忘れていた。」

玄関から出て、外に出ようとしたが忘れ物をしていたので、居間に置いてあるその前に行き、座って両手を合わせる。

「行つてきます。」

壮年の男女が笑いながら、3歳くらいの子供と一緒に写っている、写真が入れられている写真たてに向かつてそういつてドアの外に出る。

◆ 俺の名前は田中太郎。

どこにでもいそうな名前であるが、ガチでこんな名前である。

どうしてこんな名前をつけてくれやがったのか、

命名者の両親には問い詰めてやりたいところである。

好きなものはジョジョ。

もちろん、ジョジョラーである。

給料はすべてジョジョグッズを買い占めるためにぶっぱしている。

薄給だが、ホワイトな職場なので定時であることができるのは救いだ。

電車で揺られながらスマホでジョジョの元ネタの洋楽を聴く。

(・・・あー。やっぱいいわー。Queen.)

killer queenは名曲。

ジョジョのスタンドの元ネタの曲はセンスがグンばつである。
スタンドほちい。

目的の駅に着いたので電車から降りて、
改札口から出て、オフィスに続く道を歩く。

こうして働き出して3年が経った。

あつという間である。

年単位でキングクリムゾンされているような感覚だ。

（・・・あー。ジョジョの格ゲーしたい。）

3部の格ゲーを無性にしたいい気持ちがあむくむくと湧き上がってきたが、
どうにかこらえて、目的のオフィスまで足を運ばせるのだった。



「先にあがりまーす。」

「おつかれー。」

定時後になったので速攻で帰宅することにした。

飲み会の誘いがあっても知らんとばかりに足を家に運ばせる。

飲み会は一回で3000円から5000円が吹き飛ぶ。

そんだけあれば、ジョジョのフィギアが二つ買えてしまうのだ。

なので、節制（イエロー・テンパランス）は大事。

浮足立つ足取りで家に帰る最中、和服、という制服みたいなコスプレをしている

少女たちが前から歩いてきた。

（・・・コミケ帰り？・・・ジョジョのコスプレイヤーは・・・いねえか。）

トリツシュカ徐倫の恰好をしたレイヤーさんがいないかチラ見したが、

どうやらないらしい。

残念である。

今日は寝る前のコーヒーに甘いのを2つじゃなく3つ入れることにしよう。

俺はセッコと違ってそこまでいやしんぼうじゃないのだ（強弁）

というか、女子とか怖いので、マフラーで口元を覆い隠し、

道の端っこというか壁にくつつくぐらいいの感じで、

彼女たちと距離を取ってすれ違う。

かわいい子たちばかりでむんむんした（本音）

（・・・彼女、か。）

そういうえば、童貞で悩んでいた増田とか、中田は今頃どうしているんだろうなあ、と遠い目をしながら歩く。

あんなかわいい子たちとにやんにやんできたらそら最高だろうけども。うーん。あ、俺不細工だったから無理だったわ。

形兆兄貴を見習ってもつと完璧な作戦を立てねば。

二転三転する思考とともに家までの帰路につく。

——この時、俺がこうして願ったことが原因なのかはわからない。女子とにやんにやんしたいなんて。

あの時そんなことを考えていた俺の頭をダイバーダウンしてやりたい。

「……………」

「……………加賀さん？」

「……………どうしたの？加賀さん？」

「……………なんでもないわ。行きましょう。」

——あいつらとあんな関係になるなんて、ボスにだって未来予知できないだろう。

この日、俺は“運命”に出会った。

ただし、それがどんな意味を持つことになるか、この時の俺には知る由もなかった。

「あつ、やべえ!!財布忘れたー!ー!ー!!」

まあ、クツソ締まらないんだけれどもな!!フアツク!!

アリアリアリアリアリアリ・・・あり? () なあにこれえ
(遊戯風)

「あー・・・。」

枕に乗っている頭を少し上に向けて天井を見る。

ボロアパートの一室。横をちらりと見れば、

買い込んだジョジョグッズが所狭しと並んでいる。

一番くじで当てたキラークイーンとキングクリームゾンの

フィギュアは宝物である。

休日になったはいいいものの、特にやることはない。

今日の日課である名言集の熟読も終わってしまい、

五部のアニメも見返し終わってしまった。

外伝のデッド・マンズ・Qとかも何度も何度も見ており、

若干食傷気味である。

荒○先生、新刊まだですか、と心の中で問いかけたが、

もちろん答えなど返ってくるはずもなく、ごろりと寝返りをうつ。

び、と近くにあるリモコンを押してテレビをつけると、何やら緊急速報というタイトルのニュースが流れている。

『——の地域に深海棲艦が襲撃する可能性が高いので、

近隣住民の方々は速やかに非難を……。』

「……まじかー。」

自分が住んでいる地域ががつつり、ハザードマップに表示されており、よっこらせ、と体を起こす。

そろそろ来るとは思っていたが、予想通りに来られても困る。

とりあえず、最低限度のものを持って近くの体育館まで非難することにした。

「……ついてねえなあ。」

部屋に残されてお気に入りのジョジョグッズを見て、

思わずそうつぶやくのだった。



「……。。。。。」

「加賀さん。」

サイドテールの無表情の女性に声をかける、

黒髪ロングの女性。

二人とも道着姿のような服に、それぞれ青と赤の袴をはいている、奇妙な格好をしている人物である。

加賀、と呼ばれた女性の目は猛禽類のように鋭く、

また、見たものを凍てつかせるような冷たいまなざしであった。

「赤城さん。どうしました?」

「・・・・・・・・提督が見つからないこと、気にされているのですか?」

「・・・・・・・・。」

赤城と呼ばれた女性が加賀にかけて言葉は、

それまで無反応だった彼女の心を揺さぶるのに十分なものであった。

本に目を落としていた加賀は顔をあげ、眼鏡をはずして赤城のほうに向きなおる。

「・・・・・・・・大丈夫よ。いなくたって、ここは私が守って見せるわ。」

「・・・・・・・・。」

それが、ただの強がりであることを長い付き合いである赤城は即座に見抜いてしまったが、何もいうことができなかつた。

強がっていることに気づかないふりをして、いつものように、

赤城は柔和な笑みを浮かべる。

「・・・・・・・・大丈夫です。私もいますから。」

「・・・・・・・・・・。」

若干気まずい雰囲気の中、思い空気が二人の間に流れ会話が途切れる。そしてその時、そんな場に似つかわしくないサイレンが流れ出した。

「!?加賀さん!!」

「ええ。・・・すぐに周りのメンバーを集めて、出られる娘は出動よ。」

近くに立てかけてあった弓を携え、

二人は戦場へと赴く。

大切なものを守るために傷つき続ける彼女達に、

限界が見え始めていた。



「・・・・・・・・・・。」

体育館に来たのはいいが、多くの人たちがいた。

とはいっても、めんどくさがって避難しない人もいるだろうし、

これでも少ないほうなんだろう。

食料を配給している少女や、軍人さんの姿をぼーっとしながら見つめる。

(・・・何やってんだかなあ、俺・・・)

こんな時こそ、自分にできることを探して動くべきなのだろう。

だが、俺みたいな男にできることなどあるのだろうか。

ボランティアとして手伝うのもありだろうが、

かえって迷惑になる可能性もある。

おとなしく彼らの指示に従ってじっとしているのが一番だと自分に言い聞かせるのだった。

持つてきていた文庫版のジョジョを一冊バッグから取り出し、

読んでいると、何やら視線を感じる。

「・・・・・・・・？」

視線の気配は軍人さんのほうからだ。

だが、俺が目線を配るとすぐにその気配は消え、

見られている感覚はなくなつた。

一体なんだろうかと首をひねるも当然答えは返ってくることもない。

(・・・・・・・・こわっ。チープトリックか?)

背中を見せないようにしとこ。

ごろり、と布団に寝っ転がり、目をつむる。

「……………」

——再び感じ始めた視線を無視しながら。



「……………」

むくり、と起き上がりあたりを見回す。

ぶるぶると体が震え、催してきたのを感じる。

トイレに行きたくて起きてしまったようである。

辺りを見ると寝静まっており、今が深夜であることをうかがわせる。

そーつと音をたてないように足を忍ばせ、

トイレまで静かに歩いていく。

(……………こんな子供まで。)

先ほど、軍人の隣で手伝っていた少女が俺たちを囲むように配置されている

布団で静かに寝息を立てて寝入っていた。

(……………やめだやめ。さっさとしょんべん行こう。)

少女たちの寝相が悪いのか布団が蹴っ飛ばされていたので、

それをそつとかけてやり、それからすぐにトイレに向かう。

用を足した後、布団に再び戻るも目が覚めてしまったのか眠れる気がせず、なかなか寝付けずに寝返りをうつ。

仕方がないので、再び立ち上がり、コートを寝間着の上から来て、靴を履き、外に出る。

「……………満月か。」

んー、と背伸びをして、夜空に浮かぶ月を眺めてつぶやく。

深海棲艦が近くに来ているらしいが、戦火にさらされた感じもない。

今回は来なかったのか、と思いながら月を眺めていると、

声が聴こえてきた。

「あ。」

「ん?。」

後ろを見ると、セーラー服を着た、女子中学生くらいの少女が、

驚いた表情で俺の顔を見つめている。

肩くらいまである黒髪はヘアゴムで後ろにひとつにまとめられており、

少女のかわいらしさを引き立てている。

——これが、のちに長い付き合いとなる彼女達と俺の、
ファースト・コンタクトであった。

そろそろ本編に入っていく話～ウソツカナイ（すつとぼけ）

非難をしてから数日後。深海棲艦の襲撃は嘘のようになりを響め、

俺はまた、いつものような生活を再び送っていた。

ふあ、と漏れたあくびを抑えるために手を口元にやり、
ちらりと職場の窓から景色を見る。

サイレンが鳴らされていた時の緊迫感はどこにもなく、

スーツを着た男性や、下校中の学生がせわしなく道路わきの道を歩いている。

（・・・眠い。）

ジョジョのアニメがやっていたので、録画ではなく、

本放送を見ていたらご覧のざまである。

だが、本放送を見ないなどありえない。

仕事も、夜更かしもどっちもやらなくつちやならないのが、

社会人の辛いところだな。というやつである。

ブチャラティマジ男前。

かたかたかた、とキーボードでタイピングし続けていると、近くにいた同僚から声をかけられた。

「おつす。避難警報あつたけど、結局来なかつたな。」

「ああ。」

「いつそ来てくれると休めるんだが（笑）」

「やめとけよ。そういうこと言うのは。」

「・・・ま、そうだな。」

小学生の時に台風が来て、学校が休みになった時とはわけが違うのである。

そんなホイホイとやつらに來られたら俺たちの命だつて危ないだろう。

仕事が終わっているのか、カバンをひっさげて先に帰ろうとする

同僚にお疲れ、と声をかける。

——俺の頭の中は、先日あつたとある出来事でいっぱいであり、

本当は仕事どころではなかつたのだが。

俺のそばにいるそいつに目をやる。

「——運命、か。」

あの日のことが頭の中に思い浮かんでいく。

◆ それは、彼女と出会った時のこと。

「……えーと。」

「あ、す、すみません。自己紹介がまだでした。」

体育館の外で月をぼーっと眺めていたら、中学生くらいの少女にいきなり声をかけられ、困惑する。

「どうかはたから見たら事案じゃないだろうか。」

俺にそうした趣味はない。

タイプの子はトリツシユや徐倫みたいなタフな女性である。決して子供大して欲情する趣味は持ち合わせていないのだ。

もやもやとそんな思考に陥る俺を知ってか知らずか、

彼女はペこりと丁寧に頭をさげ、一礼してくる。

「私の名前は吹雪と申します。」

「……俺の名前は田中康夫。よろしく。」

「あ、はい。」

丁寧なあいさつをしてきた彼女に対して、俺も同じように、

礼儀正しく自己紹介をし、ペこりと一礼。

「それじゃ。」

「あ、はい。」

そしてそのまま横を通り過ぎようとして、

呆けた顔をする吹雪と名乗る少女の横を通り過ぎようとすると、

はっと我に返った彼女に行く手をふさがれる。

「……………って、外は危ないですよ!!」

ごまかせなかったようである。

あまいのみつつあげれば通してくれるだろうか。

……………くれそうにないなあ。

おこですよ、って感じで頬をかわいらしく膨らませている。

「……………大丈夫だろう。ちよつと街中を歩いてくるだけだつて。」

「……………むー。」

寝れないので暇なのである。薄暗い共同の室内では明かりをつけて、

ジヨジヨの電子書籍を読むこともできない。

深海棲艦の襲撃に備えての避難ではあるが、

早々何かあることはめったにない。

どれくらいありえないかというと、

ゴールド・エクスペリエンス・レクイエム喰らったボスが、

死のループから抜け出すくらいありえない。

徘徊老人よろしく歩き回りたい俺のわがままについて屈したのか、

彼女がむむむ、とうなったかと思うと、

ふう、とため息をはいてこちらをじと目で見てきた。

「……しょうがないですね。それでは、私も一緒であればいいですよ。」

「えっ。」

夜中にこんな子供を連れまわして、ロリコンだとうわさされると恥ずかしいし……

キラークイーンみたいに爆弾を量産するときめきでメモリアルなゲームの主人公と

はわけが違うのである。

「……何か？」

「……なんでもないです。」

俺の考えを察したのか、額に若干眉を寄せながらすごんでくる彼女に屈するのだった。

「・・・・・・・・・・・・・・・・。」

「・・・・・・・・・・。」

そんなこんなあつて一緒に仲良く夜のお散歩。

とはいかず、もうあれである。初対面同士、さらに言えば年が離れた男女。

しかも片方は子供という微妙な立場ということもあり、会話が弾むこともない。

だが、俺は今、あることが気にかかつて仕方なかった。

(・・・・・・・・この子はジョジョを知っているのか・?!)

そう、それが気がかりである。

中学生という厨二病にかかるこの時期、ジョジョを読んでいるか読んでいないかで残りの人生に大きな影響が出る。

もちろん、いいほうの影響であると自負しているが、

もし、読んでいなかったらぜひともお勧めしたいし、読んでいたのであれば、

好きなスタンド、キャラについて話し合いたいところである。

(・・・・・・・・やべえ。むっちゃジョジョ談義してえ・・・・・・・・!!)

ちらりと隣を黙々と歩く少女に再び目を向ける。

ストーン・フリーとか似合いそうな少女である。

その時、意を決して尋ねようとした俺の前に手をかざし、歩みを彼女が止めた。
「?どうし——」

「——」
「ええ?」

「。」。
え、という声を素で漏らすことになるなんて思いもしなかった。

だけれどもそいつは確かにそこにいた。

テレビの深海棲艦の特集で何度も見たことのある、

黒い外殻に、ぎよろりと浮き出るように飛び出ている白い目。

口は大きく開いており、舌はカメレオンのように長い。

「——ニンゲン、ダ」

——深海棲艦の怪物がそこに立っていた。

少女と、俺と、そして

『キシヤアアアア!!』

「うおおおおっ!？」

「きゃっ!？」

浮遊しながら突っ込んでくる異形の怪物たち。

人の形どころか、生物であるかさえも怪しいそれは、

俺たちがけて大きな口を開けつつ、向かってきた。

とつさに少女の手を引き、横に身をかわすようにずらすと同時に、

壁にドゴム、と音を立ててめり込んだ。

まるで、軽トラックがぶつかつたかのような圧力を前に、

ごくり、と唾を飲み込む。

(じよ、冗談じゃねえっ．．．!!あんなん喰らつたら、

車道で轢かれた猫みてえにぺしやんこにされちまうっ．．．!!)

恐怖からか、緊張して動けない俺たちを前に敵が猶予をくれるわけもなく、

壁から体を出したかと思うと、こちらめがけてまた突っ込んできた。少女、吹雪の手を再びつかみ、彼女が遅れないように全力引いて、夜の閑散とした道を走り抜ける。

「はっ!!はっ!!はっ!!やべえやべえやべえ!!」

後ろをちらりと見ると、化けどもどもはあきらめる様子もなく、闇夜に青色の目玉を光らせ続け、俺たちを追跡しているのが見えた。その光景を見て、さらに俺の地面をける力は強くなり、

心臓の鼓動もますます速まっていく。

(どうするっ!!?どうするっ!!?)

俺一人ならともかく、少女のほうが心配だ。

体力には自信があるが、彼女、吹雪は見たところ中学生くらいの子供。

走っているうちにスタミナが切れるとすれば彼女が俺たちの中で一番最初だ。

追い付かれるのは時間の問題であり、逃げ切れるかも怪しい。

そもそも、相手は化け物である。

向こうのほうスピードも高い。

『————ニンゲンガッ!!』

「うぐうおっ!!?」

「あっ！」

ついに追いつかれたのか、背中からタックルをもろに喰らい、地面に前のめりに倒れる。

とつさに彼女を突き飛ばし、追突に巻き込まれないように押しつけた。アスファルトの硬い地面に前のめりで倒れ、鼻から血が噴き出る。

顔がじんじんと熱い感覚とともに、少女のほうに視線を向けると、女の子座りで少し離れた場所に座っているのが見える。

どうやら無事のようにだ。

『テマヲカケサセヤガツテ』

「がっ!!」

ミシイ、と背中に何か重いものが乗っかってくるのを感じるのと同時に、みしみし、と何かがびび割れるような音が上がり始める。

深海棲艦の怪物に乗っかられているらしい。

ぴしい、と道路に亀裂が入り始める。

「に、にげろっ!!」

「で、でもっ・・!!」

「はやくっ!!」

「……っ。」

俺の言葉にためらい、立ち尽くす彼女を叱り飛ばすように、声を張り上げてここから離れるように叫ぶ。

その甲斐があつたのか、少女は戸惑いの表情から、

覚悟を決めたような顔つきとなり、俺と怪物から背を向けて走り出す。

(……何やってんだ、俺は。)

自分が助かるために、逃げるはずだったのに、

子供のほうを優先するなんてどうにかしてる、と思つたが、体を感じる痛みによつて思考から現実を引き戻された。

『オマエ、バカカ？ エサノブンザイデ、

ホカノエサヲニガスタメニジブンガギセイナルナドナンテナア〜』

「……うるせえ、化け物が。……ぐがっ!!」

憎まれ口をたたいた俺に返ってきたのは言葉ではなく、

さらなる重圧。体にかけられた重みがさらにその強さを増し、

俺の体を痛めつけてくる。

『ヨワイヤツガナニシテモムムダナンダヨ』

——こんな時、俺があこがれているヒーローだったら、

彼女をかつこよく助けて、目の前の化け物だって3秒でぶちのめしていることだろう。

しかし、俺にはそんな力はない。

どこまでいっても、俺はただの人間であり、何も無い。

(・・・だったらよ。)

「」

『・・・ア?』

「——その、よわっちいやつ、に。てこずっているお前、は、それ以下のクソって、ことだ、なあ・・・!!」

『』

「あぐあつ!!」

——足止めするくらいはできるよな?

少女のほうに意識を向けさせないよう、口から血を吐きながら、化け物の気を引くために、挑発を続ける。

別に、あの子のことが好きなわけでもない。

——ただ、あんな小さな子供が危ない目に合うと思ったら、

もう体が勝手に動いてしまったただけだ。

ただ、それだけのこと。

「はは、は・・・俺をつぶしたきや、ロードローラーでも、

もって、くるんだなっ・・・!!ブサ、イク・・・!!」

『・・・・・・・・。』

化け物は無言でさらに力を込めてのしかかってくる。

意識が飛びそう。でも、トーキングヘッドさえも舌を巻く、

俺の煽り力はこんなものではない。

ああ、そういえばなんでこんな目にあっていたんだっけ。

(・・・なんか、意識がぼうつと・・・。)

落ちかけていたその時、轟音とともに、

自分の体にかけられていた重さが消えたことに気が付く。

「——え?」

横に顔を向ければ、生々しい焦げ跡をつけた化け物が

道路に転がっている。

ぎよろり、とその目を光らせ、低い声でうなる。

『——ダレ、ダレ!?!』

「……ごめんなさい。遅れました。」

「……え？」

先ほどまで聞いていた声闇夜に響く。

——そこには、見たこともない仰々しい装備を付けた少女が、砲塔を化け物に向けて立っている姿があつた。

「——吹雪型駆逐艦!!敵を駆逐します!!」

聴いたこともないりりしい、彼女のそんな声が聴こえた。

艦娘というモノ

俺の目にはにわかには信じられなかった。

どうみたってその少女は普通の中学生にしか見えない。

そんな彼女、吹雪がごてごてとした物々しい装備をして、

あの深海棲艦を蹂躪しているところなど、いったい誰が信じられようか。

船の一部が体にひつついたようなそのパーツから、

砲撃が敵に浴びせられ、火の海を生み出す。

当たった怪物が悲鳴をあげながら爆炎に包まれる。

『——デキソコナイドモ・ガ・!!』

「——!!危ないです!!下がってください!!」

「ぐ……。」

ずり、ずり、と今のうちに這いずり回りながら距離を取る。

先ほどやられたダメージによって歩くことはままならないが、

這いずり回ることにくらいはできる。

闘いに巻き込まれないよう、血の河を生み出しながら、

少しずつ遠くに、少しでも遠くに行くために力を振り絞る。

見たところ、少女が押しているようだ。

先ほどまでは逃げ回るしなかったというのに、

装備があるところも違うのか。

だが――。

「・・・ぐっ!!数が・・・!!」

『・・・マヌケガ!!』

「うっー!」

どこからかわいてきた新しい増援により、次第に彼女が取りかまれていく。

最初は優勢だった戦況も、劣勢へと変わり、徐々に吹雪が被弾していく。

所かまわずに攻撃をしかけ、敵の数を減らしているものの、

それでもなお、苦しい状況である。

(・・・今なら、逃げられる・・・?)

深海棲艦たちはこちらから完全に意識をはずしているのか、

俺には目もくれず、彼女に向かっていく。

それまで、冷静だった敵のリーダーらしき怪物も、

苛立ったように周りの雑魚に命令をしている。

『ナニヲシテイル!!カコンデサツサトコロシテシマエ!!』

「……、のおっ!!」

どれほど多くの敵が襲い掛かってきても、抵抗するのをやめない彼女。俺はそんな彼女たちから離れていく。

みつともなく、ずるずるとナメクジのように這いまわって。

不意に、彼女と目が合った。

——にこり、と微笑まれた。

(……?!)

それじゃ、まるで、俺を助けるために、君は——。

「——まだまだあつ!!」

『シブトイヤツメ!!』

「うっ!!……う、うああああつ!!」

攻撃を受けた個所が被弾し、損傷した。

それまで行っていた砲撃ができなくなったのか、

砲塔を右手で取り外し、それでやたらめったらに振り回していた。

(……逃げろ、逃げるんだ。それが、”賢い”選択だ……!)

ふう、ふうと喉の奥が焼けるように熱い。

炎によって生み出された二酸化炭素が低いところに溜まり、這いずり回っている俺はもろにその影響を受ける形となる。

ハンカチで口を押えながら、みつともなくそれでも這って進み続ける。

(・・・俺みたいなただの人間じゃ、何もできない・・・)

彼女に、彼女たちみたいにな強い人に任せるんだ・・・)

自分に言い聞かせながら、道を歩み続ける。

(・・・これは、正しいことなんだ——)

ずきずきと心臓が痛む。

胸の痛みが取れない。何か、心に突き刺さって抜けないように。



吹雪型駆逐艦、吹雪という少女はどこにでもいる普通の女の子である。

戦う力を持った船ではあるが、その在り方は子供そのものである。

生まれた時からその力を守るべきもののために振るい、

その多くは海に散っていった。

かくいう、田中という男を助けるために囿になった彼女も、

そんな一人である。

つまり——。

「……………」

『……ヨウヤク、クタバツタカ。』

彼女もその例にもれず、今まさに轟沈しようとしていた。

煤と血でボロボロになった姿は、戦火にさらされた孤児のようであり、瞳からは光が失われつつある。

(……………えへへ。……し、っばい、しちや、った……………)

本来であれば、すぐさまほかの艦娘たちに連絡を取り、

合流するのがベストであった。

たとえ、田中がその結果捕食され、死ぬことになったとしても、貴重な吹雪という戦力が無駄死にすることなく、

ほかの艦娘たちとともにせん滅するのは容易いことであった。

しかし、彼女はそれを良しとしなかった。

死の間際、生物は本性をさらけ出す。

とあるものは恨みつらみを吐き捨て、とあるものは許しを請い、——そして、とあるものは己の所業に笑みを浮かべるだろう。

『サテ、セツカクノイキタママノカンムス。』

倒れ伏す吹雪に、大口を開けながら近づくと深海棲艦。

その目はギラギラと光っており、興奮している。

『イタダクトシヨウ。』

「……………」

吹雪は、人生の最後に声一つあげることもなかった。

ただ、彼女の頭の中にあつたのは先ほどまで一緒にいて、

いつの間にか姿を消していた一人の青年の事。

(……………よかった。逃げ切れたんだ……………)

ふふ、と彼女が笑うと血がこぼれ、と口元からこぼれた。

そして、彼女が喰われそうになったその瞬間。

——深海棲艦の体が吹っ飛ばされた。

「——え？」

『!?!?』

バウンドしながら、地面をごろごろと転がる怪物。

何かが彼女の横にキキ、と地面を削る音を出して止まった。

「——何してんだ!!早く、乗れっ!!」

——腹から血を流しながら、車の運転席に座っている田中が、吹雪に向かってそう声をかけた。

バカか、というほうがバカ

田中太郎という人物はおおよそ、「不幸」といえる人物であった。幼少から、その決して良いとは言えない容姿が理由でつまはじきにされ、いじめの対象とされていた。

家族との仲はわるくはなかったものの、そうした経験は、確実に彼の心をむしばんでいき、歪ませていった。

そして、両親の容姿が優れていることも、彼の心に一層のショックを与えていた。

『——自分は、この世に必要な人間なのではないか？』

幼少期から受け続けた傷は閉じることとはなく、

開き続けていく。

胸にぽっかりと穴が開いたように、空虚感だけが彼の中にあつた。

こうした考えを持つようになった田中が自殺を考えるのも、

時間の問題であつた。

ある日、彼がとある動画サイトでなんとなく閲覧していたところ、

とあるアニメに目が留まった。

そのアニメのタイトルは――。



「……………」

「……………」

夜道を走る車のエンジン音だけが社内に響き渡る。

ちらりと横目で彼女を見ると、俯いており、

どんな表情をしているかわからない。

ただ、俺も彼女も、深海棲艦にやられて、

体がボロボロになっているのは同じだった。

ふう、とため息を漏らす。

(……………これから、どうするか。)

とりあえず、あの化け物から距離を取ることはできた。

だが、避難場所からだいぶ離れたところまで来ており、

今更体育館まで戻ろうにも、あの怪物にかちあう可能性が非情に高くなり、

また襲われるかもしれない。

とはいえ、この傷を抱えたままあてもなく逃げ続けても、死ぬだろう。

アクセルペダルを踏む足に自然と力が籠る。

「……あの。」

隣で沈黙を貫いていた吹雪が、恐る恐るといった感じで、俺に話しかけてきた。

運転しているのも、目だけを彼女にちらりと向け、話を聴く。

「……どうして、私を見捨てなかったのですか？」

「……?」

「……彼女は今、何て言った？」

「見捨てる? ……確かにそうだ。」

「俺はどうしてわざわざ死ぬかもしれないのに、」

「引き返した？」

「確かにそうだ。なぜ？」

「あのまま逃げていれば助かっていただろうに。」

そうした疑問が一気に頭の中に噴き出し、

俺は何も言えなくなる。

「……人を守って死ぬのは、私たち艦娘の役割です。

だから……。」

「——うるさい。黙れ。」

「……!?!」

——自分でも信じられないほど冷たい声が出た。

なんでこの少女は、こんな達観している？

こんなことを言う？

冷静になるべきだったかもしれない。

けれどももう止めることはできなかった。

「勝手に俺の散歩についてきたばかりか、

挙句の果てに勝手に命を捨てて、俺を救おうとするだあ？」

「そ、それはあなたは民間人で、私は兵器だから——。」

「うるせえ!!まだ子供のくせにロボットみたいに振るまってんじゃねえ!!

このペチャパイ!!」

「なっ——わ、私はまだまだ成長期です!!というか、人の容姿をとやかく言うなんて、一

体どんな神経してるんですか!?!このブサイク!!」

「お前だつて言つてんだらうが!?!」

今わかった。俺はどうやらこいつの在り方が我慢できないらしい。

どう考えても相いれない。こんなガキが、軍人みたいな考えを持つて、生きていることが。

こんな子供が、そんな考えを持たされていることが。

ぎやあぎやあ、と口論する俺と吹雪。

——それが原因だったのか、バックミラーに写る”それ”に気が付くのに、一瞬遅れてしまった。

「!?!」

『——シズメ!!』

「きゃっ!?!」

後ろから車が吹っ飛ばされ、ゴロゴロと横転する。

何とかステアリングを保とうとするも、

車が横に転がっている状況では何の意味もないらしく、

ゴガン、と音を立てて歩道のガードレールに側面をぶつけ、止まった。

頭を打ったのか、ずきりとでこのあたりが痛み、手で押さえる。

後ろを見ると、あの怪物が俺たちに歩み寄ってきているのが見えた。

巻いたと思っていたが、そう易々と逃げ切れるわけもなかったらしい。

「……クソ。追いつかれていたのか……。」

「……!おい、吹雪!」

「…….…….う。」

虫が鳴くような声で返事をする彼女は、

目をつむったままうめく。

呼吸をしているので生きているが、

打ち所が悪かったのか、意識がもうろうとしているようだ。

すぐに俺と彼女のシートベルトをはずし、

車の外から出る。

痛む体に鞭を打ちながら、彼女を背負って逃げようとしていたら、

足に何かがぶつかる。

「ぐっ!?!」

『…….…….ニドモ、ヤツテクレタナムシケラガ……!!』

憤怒の表情を浮かべながら、怪物は俺の足元を撃ちぬいた。

バランスを崩して倒れ、吹雪も道端に放り出される。

(・・・畜生。・・・運がなかった・・・。)

ずり、ずり、と倒れている彼女のほうまで這って進む。

死んだような顔つきで意識を失っている彼女に覆いかぶさる。

『・・・バカガ。カバツテイルツモリカ？

——ソノママ、フタリトモシネ。』

「・・・。」

情け容赦のない言葉とともに、俺に向かって、

その大きな腕が振り下ろされ——。

ざしゆり、と血が噴き出る音が響いた。